

遺跡まつりと地域アイデンティティ

——「芝山はにわ祭」の事例分析から——

櫻井 準也

Archaeological Site Festival and Local Identity:

—— A Case Study of “SHIBAYAMA HANIWA FESTIVAL” ——

SAKURAI, Junya

Abstract

In Japan, archaeological sites were regarded as a cultural property and have been treated as an object of conservation for a long time. However, archaeological sites are utilized for tourist attractions and “town revitalization” in recent years. In this paper, I picked up “archaeological site festival” and surveyed about the actual condition of the “archaeological site festival” in Japan. And examination was added in detail about “SHIBAYAMA HANIWA(ancient clay figure) FESTIVAL” (Shibayama-machi, Chiba). As a result, I pointed out that this festival had contributed not only the role of the “town revitalization” but the creation of “local identity” for elementary and junior high school students by making it participate as the ancients.

要 約

わが国において遺跡は埋蔵文化財として捉えられ、長い間保護すべき対象として扱われてきた。しかし、近年になって遺跡を観光資源や「町おこし」などに積極的に活用しようという動きが出てきている。こうした傾向に対して、本稿では遺跡の活用のある方の一つであり、現在全国各地で実施されている「遺跡まつり」を取り上げた。まず、全国各地で実施されている「遺跡まつり」の現状について概観し、教育普及型と町おこし型という「遺跡まつり」の類型化を試みた。その後、具体的な事例として町おこし型の「遺跡まつり」である「芝山はにわ祭」（千葉県芝山町）の歴史や催しものについて詳細に検討した。そして、この祭りは行政のバックアップによる「町おこし」としての役割だけでなく、地元の小中学生を古代人として参加させることによ

って「地域アイデンティティの創出」に寄与していることを指摘した。

キーワード

遺跡まつり (Archaeological Site Festival)

観光資源 (Tourist Attraction)

町おこし (Town Revitalization)

地域アイデンティティ (Local Identity)

はじめに

21世紀になって、考古学の研究対象である遺跡やそれを行政的に捉えた埋蔵文化財をめぐる環境が大きく変化してきている。その一つとしてあげられるのは、従来から議論されてきた遺跡や史跡の保護や整備の問題に加えて観光利用を含めた遺跡や史跡の活用の問題が検討されるようになってきたことである。このことは、平成14年度の埋蔵文化財行政研究会の研究テーマが『市町村と埋蔵文化財その2—遺跡の整備と活用の実態—』（埋蔵文化財行政研究会2002）であり、翌年の2003年に『遺跡学会』が設立されたことなどに表れている。国民共有の財産である遺跡や史跡は、単に保護するだけではなく、積極的に管理し活用する対象となってきたのである。このうち遺跡の観光利用という側面では、2004年に坂詰秀一氏によって「観光考古学」が提唱され（坂詰2004）、翌2005年には東京で『シンポジウム 観光考古学Ⅱ』（国際航業株式会社2005）が開催され、その様子が収められた『観光考古学—記録と展望—』（国際航業株式会社2006）が刊行されている。その後は『考古学ジャーナル』誌における「観光考古学」の特集を経て、2012年には坂詰秀一氏監修の『考古調査ハンドブック7 観光考古学』（坂詰2012）が刊行されている。また、経済学の立場から澤村 明氏が遺跡や文化遺産が地域経済に与える影響についてまとめた著作を相次いで発表している（澤村2010・2011）。

これに対して、遺跡の活用の方法の一つとして本稿で取り上げるのが、現在全国各地で開催されている「遺跡まつり」である。「遺跡まつり」は「地域の遺跡で行われる祭り」という単純な説明では語れない複雑な様相を呈している。わが国における「遺跡まつり」は埋蔵文化財保護の観点から地元にある遺跡について楽しみながら理解を深めてもらおうという当初の目的から離れ、現在では「町おこし」や地域観光に組み込まれる事例がみられるようになってきたのである（桜井2006・2009）。そこで本稿では千葉県芝山町で実施されている「遺跡まつり」である「芝山はにわ祭」の事例を紹介しながら、「遺跡まつり」の実態と地域における役割について検討してみたい。

1. 「遺跡まつり」の現状

現在、全国各地で開催されている「遺跡まつり」には、2012年に第50回をむかえた静岡県の「登呂まつり」のように半世紀以上も前から実施されていたものもあるが、「遺跡まつり」は1980

年代頃から徐々に増え始め、現在では全国各地で実施されている。しかし、その実態が調査されることはなかったため、その全体像はいまだ把握されていないのが現状である。筆者が現在把握している範囲では、北海道・東北地方で30カ所程度、関東地方で25カ所程度、中部地方で15カ所程度、関西地方で15カ所程度、中国・四国地方で10カ所程度、九州・沖縄地方で20カ所程度の「遺跡まつり」が開催されており、全国では100カ所以上の遺跡で「遺跡まつり」が開催されることになる。また、「遺跡まつり」は、青森県三内丸山遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡のような全国的に知られている遺跡で実施されているだけでなく、最近注目されなくなったものの史跡に指定されるなど古くから地元根付いている遺跡においても「遺跡まつり」が開催されている。現在、わが国で開催されている主な「遺跡まつり」には以下のようなものがある。

だて噴火湾縄文まつり（北海道伊達市）、ピリカ遺跡まつり（北海道今金町）、JOMON 亀ヶ岡遺跡まつり（青森県津軽市）、三内丸山遺跡縄文大祭典（青森県青森市）、これかわ縄文まつり（青森県八戸市）、御所野縄文まつり（岩手県一戸町）、縄文まつり（宮城県仙台市）、ストーンサークル縄文祭（秋田県鹿角市）、長井縄文まつり（山形県長井市）、古墳まつり（福島県郡山市）、陸平縄文ムラまつり（茨城県美浦村）、寺野東縄文まつり（栃木県小山市）、くずう原人まつり（栃木県佐野市）、岩宿ムラまつり（群馬県みどり市）、かみつけの里古墳祭り（群馬県高崎市）、芝山はにわ祭（千葉県芝山町）、野毛古墳まつり（東京都世田谷区）、勝坂遺跡縄文まつり（神奈川県相模原市）、尖石縄文まつり（長野県茅野市）、さらしなの里縄文まつり（長野県千曲市）、登呂まつり（静岡県静岡市）、チカモリ縄文まつり（石川県金沢市）、うれしの天白縄文まつり（三重県松阪市）、いずみの国弥生まつり（大阪府和泉市）、田能遺跡まつり（兵庫県尼崎市）、大中遺跡まつり（兵庫県播磨町）、明石原人まつり（兵庫県明石市）、むきばんだ遺跡秋麓まつり（鳥取県大山町）、土井ヶ浜弥生まつり（山口県下関市）、吉野ヶ里ふるさと炎まつり（佐賀県吉野ヶ里町）、くにさき古代祭り（大分県国東市）、西都古墳まつり（宮崎県西都市）、縄文の森春まつり（鹿児島県霧島市）

「遺跡まつり」において実施されるイベントには様々なものがある。三内丸山遺跡の事例をあげるならば、三内丸山遺跡では「遺跡まつり」として「縄文春祭り」、「縄文夏祭り」、「縄文大祭典」、「縄文秋祭り」、「縄文冬祭り」が実施されているが、その中心となる祭りは「縄文大祭典」である。2012年度は縄文大祭典実行委員会主催、青森県・青森県教育委員会共催で9月1日（土）・2日（日）に実施されたが、9月1日（土）には発掘調査現地説明会、縄文ワークショップ（ささやきの壁、踊るドグチャン!?アニメと音の体験ワークショップ）、縄文宵待ちフォーラム（縄文のにぎわい）、お月見コンサート、月の宴、9月2日（日）には発掘現場公開、さんまる縄文講座・縄文の家づくり体験が行われた。また、9月1日（土）・2日（日）の両日にわたって、縄文パノラマビュー、クイズラリー、手しごと楽しく市、青森特産市場・秋の収穫とれたて市・青森ご当地グルメ屋台村、無料体験学習（縄文グッズ作り）、縄文生活体験コーナーも開かれている。このように、催されるイベントは発掘調査の現地説明会や発掘現場公開など学術的なものから各種のワークショップ、コンサート、クイズ、さらには地元の特産品・野菜の販売や屋台村まで様々なイベントが開催されている。

また、既に述べたように「遺跡まつり」は全国各地で開催されているが、その規模や主催者、イベントの内容など実に様々な「遺跡まつり」が存在している。それらを類型化すると、わが国の「遺跡まつり」は、(Ⅰ) 地元の行政やまつりの実行委員会が主催であるが観光協会・商工会・地元企業などがバックアップし、郷土芸能・コンサート・ダンスの発表会・移動動物園・福引や抽選会・地元物産販売など遺跡とは直接関係のない催しが多い町おこし型の「遺跡まつり」、(Ⅲ) 地元の教育委員会や博物館が主催し、文化財保護や生涯学習の観点から地元の遺跡について知ってもらい、文化遺産としての遺跡の重要性を認識してもらうことを目的にした教育普及型の「遺跡まつり」、そして(Ⅱ) 両者の中間型の「遺跡まつり」におおまかに区分できる(図1)(桜井2009)。また、(Ⅰ)の町おこし型の「遺跡まつり」は地元の商工祭や産業祭などが同時開催され、多くの露店が出店し、郷土芸能・ダンス・カラオケなどの発表会の場を提供するなど地域の祭りという色彩が強い。これに対し、(Ⅲ)の教育普及型の「遺跡まつり」は、遺跡の解説や出土遺物の展示、講演会やコンサート、火おこし・弓矢体験・勾玉作り・古代食の試食などの体験コーナーがあり、遺跡や遺物の展示解説と体験学習が中心になっている。さらに、(Ⅱ)の中間型の「遺跡まつり」は、(Ⅲ)の教育普及型の「遺跡まつり」に遺跡とは直接関係ない催しや地元の物産販売やフリーマーケットなどが加わることによって(Ⅰ)の町おこし型に近づいたものであるといえる。しかし、「遺跡まつり」は開催の経緯や運営方法など、その実態は様々である。そこで本稿では、(Ⅰ)の町おこし型の「遺跡まつり」の具体的な事例として、千葉県芝山町で毎年開催されている「芝山はにわ祭」について紹介してみたい。

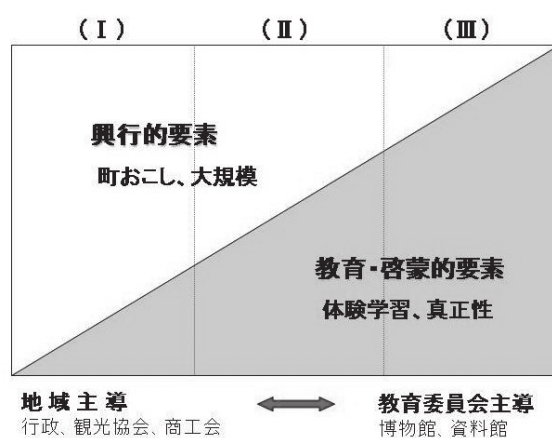


図1 「遺跡まつり」の類型 (桜井 2009)

2. 「芝山はにわ祭」の事例分析

2.1 芝山古墳群と殿塚・姫塚

千葉県芝山町は、千葉県のほぼ中央部に位置する面積43.47km²、人口約7500人の町である。町の産業は農業を基幹としているが、成田空港に隣接するため近年、空港関連事業で工業団地が造成され、工業の出荷額が急速に伸びている。芝山町周辺には数多くの古墳が確認されているが、「芝山はにわ祭」の舞台となっているのが17基の古墳で構成される芝山古墳群(中台古墳群)の中の国指定史跡、殿塚・姫塚である。芝山古墳群(中台古墳群)は1956年に早稲田大学(滝口

1956)、2000年に国立歴史民俗博物館、2012年に早稲田大学によって調査が実施された。なかでも1956年に早稲田大学によって実施された殿塚・姫塚の発掘調査は大学生だけでなく、地元の中高生・教員・青年団・消防団・婦人会などが総動員された「地域発掘」であったとされている(芝山町立芝山古墳・はにわ博物館2012)。

「芝山はにわ祭」の舞台の一つである殿塚は、芝山古墳群最大の前方後円墳で墳丘長88m、後円部径55～58m、前方部幅55m、後円部高8.6m、前方部高7.7mを測る。二段築成で長方形二重周溝が特徴となっている。埋葬施設は単室構造の横穴式石室である。埴輪は後円部墳頂と北側中堤、および東側中段テラスで円筒埴輪列が検出されている。形象埴輪は中段テラスに人物・動物・器財が70体以上並んでいたと思われる。副葬品は装身具・銅碗・大刀・鉄鏃・刀子などである。これに対し、姫塚は同じく前方後円墳で墳丘長58.5m、後円部径35m、前方部幅36m、後円部高4.5m、前方部高4.8mを測る。二段築成で二重周溝である。埋葬施設は複室構造の横穴式石室である。埴輪は前方部墳頂部および南側の中段テラスから円筒埴輪列が検出された。形象埴輪は40体以上が検出されており、北側の中段テラスに外を向いて樹立されていた。副葬品は装身具・馬具・大刀・鉄鏃・刀子などである。両古墳ともこの地域の首長クラスの古墳であり、築造は6世紀中頃とされている。なお、殿塚・姫塚はそれまで不明であった形象埴輪の配列を知ることができる古墳として全国的に話題になり、1958年に国指定史跡となり、出土した埴輪も県指定文化財となっている。また、数多くの古墳が確認されている芝山町では1988年に芝山町立芝山古墳・はにわ博物館が開館している。

2.2 「芝山はにわ祭」開催の経緯

芝山古墳群の殿塚・姫塚は「芝山はにわ祭」が開催される契機となった古墳であるが、その背景に1956年の殿塚・姫塚の発掘調査によって地域がまとまったという歴史があり、「これは、地域が一丸となった発掘プロジェクトという歴史的な過程を経て、両古墳に付与され、二次的に創出された文化財の新たな価値である」(芝山町立芝山古墳・はにわ博物館2012: pp1)とされている。そして、そのような過去の町の記憶が蘇り、「芝山はにわ祭」が開催される直接的な原因となったのが「成田空港(新東京国際空港)建設問題」であった。その経緯は次のようなものである。

1962年に政府は新国際空港の建設を閣議決定し、建設地として埋め立て案(浦安沖・木更津沖・霞ヶ浦)と内陸案(富里・八街付近)が検討された。その後、1965年に建設地が富里に内定したが、地元の住民による反対運動が起こり、そのため政府は1966年7月に成田市三里塚に建設地を閣議決定した。そして、芝山町菱田地区が騒音地帯となるため三里塚地区の住民とともに同年11月「三里塚・芝山連合反対同盟」が結成された。芝山町議会は同年7月に絶対反対と条件付き反対の2案が提出され、建設に強く反対する決議案を可決したが、12月に白紙撤回されている。これに対して、反対派が翌年1月に町議全員のリコール運動を展開し、10月には条件付き賛成派によって「芝山町空港対策連絡協議会」が結成されるなど、空港建設問題によって町が混乱した。その後、学生運動組織と連携して現地にバリケードを築いて実力で建設を阻止しようとしたが、1971年の2月と9月に大規模な強制代執行が実施された。そして、1977年には反対派のシンボルであった大鉄塔が撤去され、翌1978年5月に成田空港(新東京国際空港)は開港したのであ

る（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館2012）。

1982年に開催された第1回の「芝山はにわ祭」は、このような成田空港建設問題に揺れた芝山町が「今から24年前の昭和57年10月——『町民が一つになれる祭りを開催して、住民の融和と町おこしの一翼を担おう』と町内の有志7人が『はにわ祭』を提案した」（『広報しばやま』2006年12月号）町おこし事業として企画されたものであった。その契機となったのは第1回の祭りが開催される2年前に伊藤高夫氏が自費を投じて豪族の衣装を復元したことであった。衣装は、1956年の殿塚・姫塚古墳の発掘に携わった滝口 宏早稲田大学名誉教授のアドバイスに基づき、古代衣装研究家の小堀栄寿氏に依頼して作成された。素材の麻には古代のものに最も近いといわれるフィリピンのマニラ麻を、首飾りには甲府から買い付けた印度ヒスイを用いた。費用は豪族男女が約100万円、その他の武人や侍女のものでも20万円ほどかかったという（『千葉日報』1982年11月1日）。こうしたなか町の名刹である芝山仁王尊の住職濱名徳永氏、町内に住む村山元英千葉大学教授、空港問題に端を発した「花の輪運動」の推進者土井修司らの提唱で、1982年10月31日に第1回「ハニワ祭り」（第3回以降「はにわ祭」に名称変更）が開催された。「芝山はにわ祭」は1988年に昭和天皇の病状を考慮して取りやめになり、1997年に町長が収賄容疑で逮捕され中止になることはあったが（表1）、現在まで継続されており、2013年には第31回の「芝山はにわ祭」が開催されている。なお、「芝山はにわ祭」誕生の30年後にあたる2012年11月3日から12月2日にかけて特別展『はにわと共に生きる町—殿塚・姫塚古墳調査の過去・未来—』が古墳・はにわ博物館で開催され、「芝山はにわ祭」の歴史に関する展示も行われた（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館2012）。

表1 「芝山はにわ祭」年表（2005年まで）

	開催日	主な内容	その他
第1回	1982年10月31日	降臨の儀 10時～ 殿塚・姫塚 歓迎の法要 芝山仁王尊 白粉粉屋踊、町民音頭、獅子舞 パレード 午後 町内の商店街 小学校鼓笛隊、みこし、白枳地区粉屋踊り連	名称は「ハニワ祭り」、メイン会場は芝山仁王寺観音教寺、古代人45人は町民有志・婦人会、衣装は滝口宏早大名誉教授のアドバイスを受け、古代衣装研究家小堀栄寿氏が作成、国造は小川英 町区長会長、約6000人の見物客
第2回	1983年11月12日・13日	降臨の儀 12日 殿塚・姫塚 交歓の儀 13日 獅子舞、白粉粉屋踊、光町虫生寺の“鬼来迎” パレード 13日12時30分～15時10分 真行寺建設前から白枳地区 農業の宴 ～14日 小池共同利用施設 畜産共進会 13日 理研グラウンド 文化の宴 12日・13日 中央公民館 各文化団体、一般町民、小、中学生、保育園、幼稚園児などの作品展示、東金電報電話局、東京電力東金営業所、郵便局などの展示コーナー その他 菊花展、植木市、青空市、演芸大会、縄文土器製作実演	名称は「ハニワ祭り」、実行委員長は浜名徳永氏
第3回	1984年11月10日・11日	降臨の儀 10日14時～ 殿塚・姫塚 殿部田神楽、神官の祝詞、石室開扉、古代人出現、国造のご託宣ほか 交歓の儀 11日10時～ 観音教寺 古代人来臨、歓迎法要、みこの舞い、蓮沼村五所神社奉納、十二面神楽	名称これ以降「はにわ祭」、古代人45人、衣装代は豪族男女が約100万円、武人や侍女でも一体20万円

		<p>行列の儀 11日13時～ 町内 古代人の行幸、殿部田おはやし、山車、子供みこし、鼓笛隊ほか</p> <p>昇天の儀 国造メッセージ、かがり火、昇天の辞、みこの舞、ほか</p> <p>農業の宴 10日8時～12時、11日9時～16時 小池協同利用施設</p> <p>文化の宴 10日9時～16時、11日9時～16時 公民館・商工会館、中央研修所</p> <p>昼の宴 10日10時～16時 役場前 芸能共演会、のど自慢大会、健康まつり、模擬店ほか</p> <p>夜の宴 17時～20時 芝山ユネスコナイト、村の憩い、一人一芸、語ろう文化の里を、ほか</p>	
第4回	1985年11月9日・10日	<p>降臨の儀 9日 殿塚・姫塚 神官の祝詞、古代人の出現、伊橋町議会議長歓迎の辞、国造ご託宣、町長宣詞、巫女3人の舞</p> <p>交歓の儀、行列の儀、昇天の儀、古代人の行列、子供みこし 10日</p>	古代人約30人、降臨の儀に約100人の観光客
第5回	1986年11月8日・9日	<p>降臨の儀 8日 殿塚・姫塚</p> <p>古代食の試食会 12時～ 芝山仁王尊客殿 メニュー：クリのおこわ、アユの塩焼き、サケのくん製、サザエの刺身、山芋など7種のおかず、きのこ汁、濁り酒、どんぐりクッキー、ヒシの実（八千代市にある自然食のレストランの風間千代子氏が製作）</p> <p>古代文化のシンポジウム</p>	
第6回	1987年11月7日・8日	<p>会場 中央公民館、町役場前広場、農業者トレーニングセンターほか</p> <p>降臨の儀、行列の儀、文化の宴、産業の宴など</p>	
第7回	昭和天皇の病状など諸情勢から取りやめ（1988年）		<p>5月 芝山古墳・はにわ博物館、芝山公園完成</p> <p>7月 観光協会設立、シンポジウムなど各種催しが開催される</p>
第8回	1989年11月12日	<p>降臨の儀 9時50分～</p> <p>交歓の儀 午前中 観音教寺 巫女の舞い、大富ばやし（成東町）</p> <p>行列の儀 13時5分～ 中心街 古代人、山車、子供はにわみこし</p> <p>昇天の儀 15時40分～</p> <p>産業の宴 植木市、青空市、ミニ動物園など</p>	
第9回	1990年11月	記事なし	
第10回	1991年11月	記事なし	
第11回	1992年11月	記事なし	
第12回	1993年11月14日	<p>降臨の儀</p> <p>交歓の儀 芝山仁王尊・観音教寺 郷土芸能、巫女、古代人</p> <p>行列の儀 午後 古代人のパレード、みこし、プラスバンド</p> <p>文化センターのイベント 「川津場芋煮会」、「カナリヤナス」販売（町社会福祉協議会）</p> <p>「酥」の試食会（芝山古墳・はにわ博物館）</p>	古代衣装の小中学生がカメラマンに人気
第13回	1994年11月13日	<p>降臨の儀 殿塚・姫塚 神官の祝詞、殿部田神楽、国造のご託宣、巫女の舞</p> <p>産業祭 文化センター 青空市、即売会、模擬店</p> <p>酥の試食コーナー（芝山古墳・はにわ博物館）</p>	古代人は芝山中学校2年生ら、国造は真行寺一朗前町長
第14回	1995年11月12日	<p>降臨の儀 殿塚・姫塚</p> <p>交歓の儀 芝山仁王尊 歓迎の法要 巫女の舞（中学生）</p> <p>産業祭 文化センター 露店、即売コーナー、麻薬犬のデモンストレーション</p> <p>酥の試食（芝山古墳・はにわ博物館）</p>	

第15回	1996年11月10日	降臨の儀 殿塚・姫塚 ご託宣、みこの舞い 交歓の儀 芝山仁王尊・観音教寺 歓迎の儀 文化センター 行列の儀 芝山小鼓笛隊（先頭）、はにわみこし 昇天の儀 芝山小学校 第11回山武地域農林業まつり（芝山文化センター広場）	古代人約60人 国造は石井國夫 芝山中校長
—	町長が収賄容疑で逮捕され中止（1997年）		11月9日に開催予定
第16回	1998年11月8日	降臨の儀 9:50～ 殿塚・姫塚 国造の御託宣、巫女の舞い（芝山中学校2年4名） 産業祭 芝山文化センター 物品販売	古代人56人、国造は戸井信雄町 区長会長
第17回	1999年11月14日	降臨の儀 10:00～ 殿塚・姫塚 古代人の登場、巫女の舞い（芝山中学校2年4名） 交歓の儀 芝山仁王尊・観音教寺 歓迎の儀 文化センター 昇天の儀 芝山小 かがり火 産業祭 文化センター 農産物販売 文化祭（公民館）、健康まつり（保険センター）	古代人40人、巫女17人、国造は 椿茂町区長会長
第18回	2000年11月12日	降臨の儀 9:50～ 殿塚・姫塚 巫女の舞い（芝山中学校2年4名） 交歓の儀 芝山仁王尊 歓迎法要 行列の儀 文化センターまで 歓迎の儀 昇天の儀 かがり火 産業祭 文化センター広場 大道芸、アトラクション、古代食試食会	古代人60人、国造は渡辺美基町 区長会長
第19回	2001年11月11日	降臨の儀 古代人出現 巫女の舞い（4人） 交歓の儀 仁王尊 行列の儀 歓迎の儀 文化センター 昇天の儀 芝山小 産業祭・文化祭 芝山文化センター	古代人約60人
第20回	2002年11月10日	降臨の儀 巫女の舞い（女子中学生） 産業祭、商工まつり 写真コンクール	古代人57人、この年より国造が 俳優 荒井紀人氏になる 10月27日 芝山鉄道開通
第21回	2003年11月2日	降臨の儀 殿塚・姫塚 神楽、神官の祝詞、相川勝重町長による宣旨、巫女の舞（女子中学生） 旅籠サミット 江戸時代の旅館 現代人と交流 交歓の儀 芝山仁王尊・観音教寺 行列の儀 歓迎の儀 文化センター 昇天の儀 かがり火、花火 産業祭、商工まつり 芝山公園 青空市、農産物即売、植木市、模擬店 芝山公園隣接の「花の里」で一日茶屋（古代人のティータイム：山中花の会） 古代米（黒紫米）茶、びわの葉茶、クマ笹茶 古代米を使ったクッキー、揚げせんべい、もちつき（きなこ）の実演販売	古代人56人、国造は荒井紀人氏、実行委員長は五木田勝実氏
第22回	2004年11月14日	降臨の儀 古代人の出現 交換の儀 芝山仁王尊 江戸時代の旅籠で古代人の昼食 地元はなの里産の黒米、サケ、ハマグリ、木の実 行列の儀 歓迎の儀 芝山公園広場ステージ 昇天の儀 かがり火、花火	古代人57人、堂本千葉県知事も 古代人役で参加
第23回	2005年11月3日	記事なし	

※『千葉日報』の記事より

2.3 「芝山はにわ祭」の概要

昨年度開催された第31回「芝山はにわ祭」の概要は以下のようなものである（写真は2006年度）。

開催日：2013年11月10日（日）

開催地：芝山公園周辺（千葉県山武郡芝山町）

主催：芝山はにわ祭実行委員会

後援：芝山町・芝山町観光協会・千葉県教育委員会・（公社）千葉県観光物産協会・成田国際空港㈱・芝山町商工会ほか各種団体

協力：横芝光町・京成電鉄㈱・芝山鉄道㈱

催し物：

降臨の儀

時間 9:20～10:00

場所 殿塚・姫塚

古事記の記す天の岩戸開きになぞらえて、古墳の石室の開扉を祈る。当地方開拓の祖である武射国造から託宣を受ける。殿部田のお囃子の伴奏で巫女の舞が披露される。

殿部田お囃子／神官の祝詞／古代人の出現／歓迎の辞／国造の御託宣／町長の誓詞／巫女の舞

交歓の儀

時間 10:45～11:45

場所 芝山仁王尊

芝山仁王尊境内に古代人の来臨を仰ぎ、僧侶による歓迎法要があり、現代人と交歓を行う。巫女の舞と白柵粉屋踊りが披露される。

古代人来臨／歓迎法要／巫女の舞／白柵粉屋踊り



図2 「芝山はにわ祭」のリーフレット



写真1 降臨の儀



写真2 交歓の儀

行列の儀

時間 13:00～13:40

場所 芝山仁王尊 三重塔脇～芝山公園

古代人が勢揃いして、現代人の業を観閲、護符を配りながら練り歩く。「子どもはにわみこし」も登場する。

古代人の行列／子どもはにわみこし



写真3 行列の儀

歓迎の儀

時間 14:00～14:30

場所 芝山公園芝生広場

古代人歓迎のため、現代人によるアトラクションが催される。現代人が歓迎の言葉を述べ、巫女の舞と白柰粉屋踊りが披露される。

委員長あいさつ／歓迎の言葉／巫女の舞／白柰粉屋踊り



写真4 歓迎の儀

昇天の儀

時間 16:40～17:00

場所 芝山公園芝生広場

現代人の見守る中で、古代人はメッセージを残し、明年の再開を約束してかがり火の中、静かに昇天する。

かがり火／現代人、古代人のメッセージ交換／昇天



写真5 昇天の儀

メインステージイベント

時間 10:00～12:30

歌謡ショー／踊り（ベリーダンス・フラダンス）／空手演武

時間 13:00

しばっこくん（芝山町キャラクター）お誕生日会

産業祭

時間 9:00～16:30

場所 芝山公園芝生広場

地元産品即売／もちつき／ミニ動物園

文化祭

時間 9:00～17:00（11月2日～10日）

場所 役場脇中央公民館

商工まつり

時間 10:00～16:30

場所 芝山公園芝生広場

スタンプ福引大会／ウルトラクイズ／

大モチ投げ大会

写真コンクール

協賛イベント

古代体験村 時間 10:00～15:00

場所 芝山古墳はにわ博物館

勾玉づくり／火おこし／古代チーズ
の試食等

ミニ動物園 場所 芝山公園芝生広場

ミニSL 場所 芝山公園駐車場

芝山ギネス大会

場所 芝山古墳はにわ博物館駐車場

種目 将棋積み／輪ゴム通し／小豆運
び／ザ・Weight／突撃三銃士／
フリースロー(バスケット)／ダイス
スロー／ストラックアウト(野
球)／キックターゲット(サッ
カー)等

このように、「芝山はにわ祭」では様々な催しが開催されているが、その中心となるのは、「降臨の儀」、「交歓の儀」、「行列の儀」、「歓迎の儀」、「昇天の儀」である。これは「古代人の出現」→「古代人の来臨を仰ぎ、歓迎の法要と現代人との交歓」→「古代人の一族が勢揃いし、行列を行う」→「古代人と現代人との交流」→「古代人がメッセージを残して昇天する」というストーリー性をもった一連の儀式(イベント)であり、この祭りの中核となっている(このうち、「降臨の儀」に関しては第1回から存在しており、第3回以降現在の形になっている)。これに対し、30年の歴史がある「芝山はにわ祭」は、日程や会場が途中で変更となっている。例え



写真6 古代人に扮する地元中学生



写真7 地元中学生の巫女の舞い



写真8 「子どもはにわみこし」を担ぐ
地元小学生

ば、当初二日間の開催であった日程が第8回（1989年）以降一日開催となっている。また、「行列の儀」のコースが変わり、当初の「農業の宴」、「文化の宴」、「産業の宴」は「産業祭」、「文化祭」、「商工まつり」へと変更されている。しかし、第20回にメイン会場を芝山公園周辺に移してからは催し物の名称や開催場所はほぼ固定している。このような経緯を経て「芝山はにわ祭」は徐々に地域に定着していった。まつりの人出は第1回が6000人であったものがその後、町の人口をはるかに凌ぐ30000人程度に増加し、現在では町最大のイベントとなっている。



写真9 露店と古代人（地元中学生）

また、「芝山はにわ祭」は多くの人々が楽しめる「遺跡まつり」であり、古墳や埴輪という歴史的要素とは無関係に、地域住民に伝統芸能や踊り（ダンス）などの発表の場や演歌歌手のコンサートを無料で聴ける場を提供している。一般参加者の関心は一連の古代の儀式よりも多くの企業や組合、地元の店などが参加している地元産品即売や露店、福引大会、クイズ、モチ投げ大会などの催しにあり、ミニ動物園や博物館の古代体験村の催し物（火おこしや勾玉づくり）も子どもたちに人気である。また、アマチュアカメラマンにとっては当時の衣装を身にまとった古代人が最大の魅力である。このように、様々な興味や年代の人々が楽しめるイベントを用意したことが、創設から30年を経た現在でもこの祭りが町最大のイベントとして定着している理由であると考えられる。

最後に、「芝山はにわ祭」が他の「遺跡まつり」と異なる点として地元の子どもたちが祭りに積極的に参加していることがあげられる。具体的には、地元の小中学生が古代人に扮して一連の儀式に参加し（写真6・9）、女子中学生が巫女に扮して巫女の舞を披露している（写真7）。また、行列の儀には子ども会単位で「子どもはにわみこし」を担ぎ山車を引いて行列に加わっているが（写真8）、このような祭りへの参加を通じて地域の一体感が醸成されるとともに、子どもたちに地域の歴史への興味を抱かせる機会となっている。この点については、祭りのポスターに使用されるキャラクターが当初国造中心であったものが第5回以降、巫女や子どもの古代人が中心となっているという指摘（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館2012：pp6）にあるように、祭りが始まった当初は古代から降臨する国造のイメージが強かったが、次第に「町民が古代人に扮して参加するまつり」というイメージに変わっていったことが想像できる。

3. 「遺跡まつり」と地域アイデンティティの創出

以上、今回紹介した「芝山はにわ祭」は町おこし型の「遺跡まつり」であり、その中でも行政や地元の各種団体が積極的にバックアップする「遺跡まつり」である。これは筆者が以前に紹介した栃木県佐野市の「くずう原人まつり」（桜井2006）のように地元商工会青年部を中心とした行政に依存しない「遺跡まつり」とは若干異なるものであるが、両者とも興行的に成功している

「遺跡まつり」であるといえる。そして、これらの町おこし型の「遺跡まつり」の事例を検討すると、いくつかの成功の秘訣を指摘することができる（図3）（櫻井2009）。

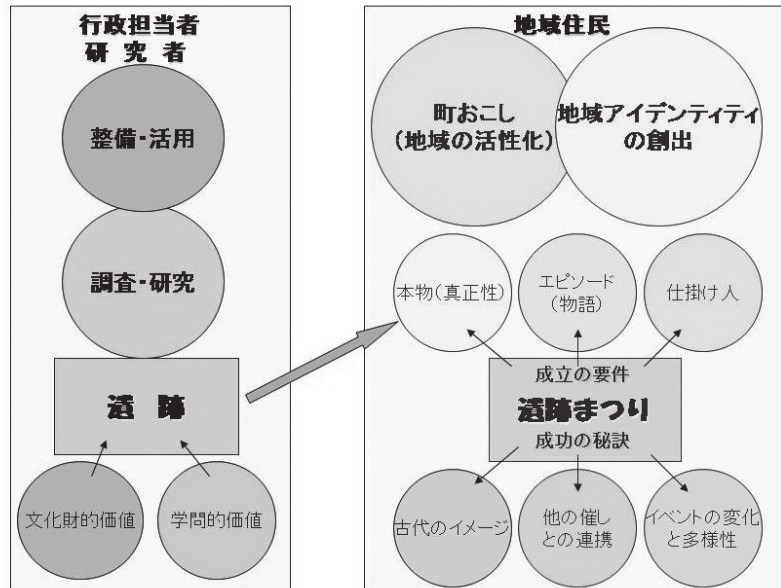


図3 「遺跡まつり」をめぐる見取り図（櫻井 2009）

まず、「遺跡まつり」が成立する要件として、①本物であること（真正性）、②エピソード（物語）の存在、③仕掛け人の存在があげられる。このうち、「本物であること」はその遺跡が考古学的に価値のある本物であることであり、考古学者がお墨付きを与える役割を担う。「芝山はにわ祭」の場合は早稲田大学の滝口 宏氏がその役割を演じた。次の「エピソード（物語）」とは、「遺跡まつり」の契機となった物語や実現にあたっての苦労話などであり、「芝山はにわ祭」の場合はかつて町を二分した成田空港建設問題である。最後の「仕掛け人」は、祭りの実現に中心的な役割を果たした人物の存在であり、「芝山はにわ祭」の場合は、自費を投じて古代の衣装を復元した伊藤高夫氏、芝山仁王尊の住職濱名徳永氏、村山元英千葉大学教授、「花の輪運動」の推進者土井修司らということになる。次に、「遺跡まつり」が成功する秘訣として、①古代のイメージの具現化、②他の催しとの連携、③イベントの変化と多様性があげられる。このうち、「古代のイメージ」の具現化については、「芝山はにわ祭」の場合当時の衣装を身にまとった古代人を登場させることであり、「他の催しとの連携」については産業祭・文化祭・商工まつりがこれにあたる。最後の「イベントの変化と多様性」は、その祭りにとって中核となる催し物（「芝山はにわ祭」の場合は「降臨の儀」、「交歓の儀」、「行列の儀」、「歓迎の儀」、「昇天の儀」である）以外を固定させず状況に応じて変化させることであり、イベントに多様性をもたせ、すべての年齢層が楽しめるようにすることがこれにあたる。

このような「遺跡まつり」運営における秘訣は、「遺跡まつり」を興行的に成功させ、継続させるために必要な条件である。しかし、それ以外にも地域にとって「遺跡まつり」を開催する意義があることを忘れてはならない。それは「遺跡まつり」の開催し、継続させることによって

「地域アイデンティティ」が創出されることである。「地域アイデンティティ」という用語は、文化庁が刊行した『埋蔵文化財の保存と活用（報告）―地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政―』（埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会2007）において埋蔵文化財の「地域および教育的資産としての意義」として「地域のアイデンティティの確立」があげられているように、近年わが国で地域文化活動を実施する際に期待される効果として喧伝されている。アイデンティティ（identity）という用語は精神分析学者で心理歴史研究の創始者とされているエリック・エリクソンが使用した用語であり、存在証明、自己同一性、帰属意識などと訳されるが、この用語は人の意識と歴史や社会の関係を解明する重要な役割を果たしてきた。栗原 彬氏はアイデンティティの最小限の基準は人生の諸項目の配列の型が集团的なものと結びつくことであり、それが名前・性別・職業・地位・所属集団・民族・風俗・習慣・儀礼などに即して役割的アイデンティティを持つとしている。そして、それらを束ねてより上位のアイデンティティである自我アイデンティティ（自我の相対化機能）が形成されるのである（栗原1982）。また、栗原氏はアイデンティティが、①個体史と歴史との遭遇において成り立つこと、②個性性と共同性が交差する場に存立すること、③不易性と転調との力動的関係のなかに紡がれること、④同一性と差異性との交差の場に顕在化すること、といった傾向を指摘している。「芝山はにわ祭」に参加した地元の小中学生はまさに郷土の歴史と遭遇したことになる。また、祭りという場は個人が共同性と交差する場でもあるが、この経験を通して地元の小中学生に「芝山＝古墳」あるいは「芝山＝埴輪」というイメージが定着し、新たな地域アイデンティティが芽生えることが期待されるのである。さらに「芝山はにわ祭」の場合、単に祭りを見るのではなく、彼らが自ら古代人に扮装して一連の儀式に参加することにより、その効果が高まっていることは明らかである。

地域の祭りへの参加が地域アイデンティティが芽生える契機となるという点については、当然のことながら「遺跡まつり」に限ったことでなく、全国各地で実施されている通常の祭り（祭礼）、さらに岡山県の「桃太郎まつり」（加原2004）のような観光行事として行われている祭りにもあてはまるものである。しかし、地域振興や町おこしとしての側面が強調されがちな地域の祭りと遺跡（埋蔵文化財）を結び付けた町おこし型の「遺跡まつり」の効果として、地域アイデンティティの創出が想定できることは十分認識しておく必要がある。前述した文化庁の報告において埋蔵文化財の「地域および教育的資産としての意義」として「地域のアイデンティティの確立」があげられているが、それを通常の遺跡などの埋蔵文化財の普及活動で成し遂げることは容易ではなく、「遺跡まつり」にその役割を担うことが期待されるのである。

おわりに

近年、わが国の考古学界では考古学と社会に関わる諸問題を扱う新たな研究分野として「パブリック・アーケオロジー」（public archaeology）が注目されている（松田・岡村2012）。「パブリック・アーケオロジー」は、平成18年（2006）に『共生の考古学―過去との対話、遺産の継承』というテーマで世界考古学会議（WAC）中間会議大阪大会（世界考古学会議中間会議大阪大会実行委員会事務局2006）が開催され、その中で「パブリック考古学―考古学は誰のためのものか」というセッションが設けられたことにより、わが国でも関心が高まった。「パブリック・ア

「アーケオロジー」は「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて、両者の関係を実践を通して改善する試み」(松田・岡村2012: 21頁)とされ、国内外の考古学政策、考古学と教育、考古学と政治・経済、考古学と民族、考古学と観光など考古学と社会を関わる様々な問題を扱っている。本稿で検討した「遺跡まつり」は「パブリック・アーケオロジー」の一部として位置づけられるとともに考古学と地域社会の関係を探る重要な研究テーマの一つである。今後は既に紹介した「観光考古学」だけでなく、本稿で扱った町おこし型の「遺跡まつり」についても遺跡活用の一つの方法として取り上げ、開催の意義やその効果について積極的に議論していく必要があるだろう。

引用・参考文献

- 岡本祐子(編著)『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房、2002年
- 加原奈穂子「地域アイデンティティ創出の核としての桃太郎—岡山における桃太郎伝説の事例から—」『日本民俗学』236号、2004年
- 栗原 彬『歴史とアイデンティティ—近代日本の心理=歴史研究』新曜社、1982年
- 古賀保元2012「遺跡活用の新たな視点」『立法と調査』NO.333
- 国際航業株式会社『シンポジウム記録集 観光考古学 記録と展望』、2006年
- 坂詰秀一「観光考古学生い立ちの記」『考古学ジャーナル』609号、2011年
- 坂詰秀一(監修)『考古調査ハンドブック7 観光考古学』ニューサイエンス社、2012年
- 桜井準也「消費される遺跡、継承される遺跡—「くずう原人まつり」にみる遺跡の活用—」東邦大学付属東邦高等学校考古学研究会『東邦考古』30号、2006年
- 桜井準也「文化資産としての遺跡—遺跡まつりと町おこし—」『シンポジウム文化資産の活用と地域文化政策の未来 論文集』ヘリテージ・スタディーズ研究会、2009年
- だて噴火湾縄文フェスタ実行委員会(編)『縄文の声を聴いた10日間—縄文フェスタ奮戦記—』、2002年
- 澤村 明『文化遺産と地域経済』同成社、2010年
- 澤村 明『遺跡と観光』同成社、2011年
- 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館『はにわと共に生きる町—殿塚・姫塚古墳調査の過去・未来—』、2012年
- 世界考古学会議中間会議大阪大会実行委員会事務局『共生の考古学—過去との対話、遺産の継承—世界考古学会議中間会議大阪大会2006プログラム・要旨集』、2006年
- 滝口 宏「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』第19・20合併号、1956年
- 滝口 宏・久地岡榛雄『はにわ』日本経済新聞社、1963年
- 鑑 幹八郎『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版、2002年
- 埋蔵文化財行政研究会『平成14年度第3回埋蔵文化財行政研究会発表要旨 遺跡の整備と活用の実態』、2002年
- 埋蔵文化財行政研究会『遺跡の保存と活用—シンポジウム記録集—』、2003年
- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財の保存と活用(報告)—地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政—』、2007年
- 松田 陽・岡村勝行『入門パブリック・アーケオロジー』同成社、2012年
- 三井宏隆『セルフ・アイデンティティ・インタラクション』垣内出版、2000年

